

元祖義太夫生る

百姓の子で天狗鼻の天才

その頃、天王寺逢阪のほとり、安居天神の山下に、さゝやかな畑地を耕してゐる二十歳あまりの一人の若者があつた。若者は頗丈な體軀を毎日この畑地へ運んで來ては、せつせとよく働いてゐた。土地の人達はこの若者を五郎兵衛と呼んでゐた。五郎兵衛には、毎日同じやうなことを繰り返してゐるこの畑仕事の他に、實は人知れぬ楽しみがあつたのである。麗らかな日差しを浴びながら、青空を仰いで、この頃流行の淨瑠璃節を、聲張り上げて語つてゐる氣持はなんと云へぬ愉快さであつた。事實五郎兵衛は他の百姓の子などの眞似も出来ない大きな聲をもつてゐて、他の者が田植歌やたゞの野良歌より唄へぬのに反して、自分だけが淨瑠璃節をすんずん唸ることが出来るので馬鹿に嬉しかつた。

稽古もしない五郎兵衛が、いつの間に、淨瑠璃を覚え込んだのか、それにはこの畑地が五郎

兵衛に淨瑠璃を教へるのに、恰ど都合よく出来てゐた。この畑地の東にあたる崖の上には、その頃天王寺に於ける八軒茶屋の中でも、福屋などと並び稱されて有名な徳屋といふ料亭が、天神山の翠巒を背負つて、五郎兵衛の畑地を覗いてゐる。その二階座敷が畑仕事をしてゐる五郎兵衛のホンの頭の上にあつて、こゝから五郎兵衛の好きな淨瑠璃が絶えず聞こえてくる。最初はたゞの口眞似をしてゐるに過ぎなかつたが、日を経るに従つて、淨瑠璃のおもしろ味が忘れられなくなつて來た。それもその筈で、その徳屋の二階から漏れてくる淨瑠璃といふのは、當時大阪の淨瑠璃界の霸王井上播磨掾の従弟で、播磨掾の引退をした後、二世播磨として持つて囃された井上流淨瑠璃の直傳清水理兵衛の稽古場からくる堂々たるものであつたのである。この清水理兵衛は實はこの徳屋の主人で、料理の本業の他にかうして淨瑠璃の正統を繼ぎ、おまけに謡曲もやる、茶道、生花、圍碁、俳諧、なんでも御座れといふ風流人であつたから、多くの文人墨客や、門弟達がいづも出入りをしてゐて、二階ではよく淨瑠璃の稽古を門弟達にしてやつてゐた。

かうした環境に日を送つてゐるのだから、五郎兵衛の淨瑠璃熱がだんだん高まつてくるのも無理はない、追々と楽しみながら一步を進めて野心といふのに變つて來た。

『俺れだつて、遣れないことはない』

たいていのこの年頃の若者が抱くやうな空想さへ五郎兵衛は浮べてゐた。年が年中田圃の中に泥足を踏み込んで、變化もない畑仕事にあくせくするよりも、男と産れたかぎり、大勢の世間の人達の前で、得意の淨瑠璃を語つてヤンヤと褒められた時はどうあらう、武士のやうに肩衣を着込んで見臺の前に直つてかう身構へた心持は……などと取止めもなくそれからそれへと憧れの心を馳せた。

いふまでもなく、淨瑠璃太夫は、他の藝人や、又は普通の町人などと違つて、既に太夫の稱を許され、なほその上優れた技倆をもつてゐれば九重の雲深きあたり天聽に達し官名を授けられる、誰しも志のあるものが、これを一生の志願にしたのは當然である。金平淨瑠璃（いんぎょ）で名を擧げた櫻井丹波掾の如き、最初斯の道へ入る時『職人、商人となつては、事により無念なる儀もあり、人に構はぬ淨瑠璃太夫然る可し』と云つてゐる。そのやうに五郎兵衛の太夫志望熱も、當時の時勢として、無理のないものであつた。

『一日も早く鍬や鋤を捨て、』

と、かう自信を有つやうになつて來たある夏の日盛りの頃である。いつもの畑で晝の辨當を

すました五郎兵衛は、だし抜けに、井上流の淨瑠璃を、聲張り上げて語り出した。

すぐ上の二階にゐた清水理兵衛の耳へこの底力のある重々しい大聲が、けふはめづらしくも響いて來た。理兵衛はちつと耳を澄まして五郎兵衛の語るがまゝを聞いてゐた。

専門家の理兵衛の耳へ百姓の五郎兵衛が語る淨瑠璃が聞ける程度のものでないことはいふまでもない、しかし理兵衛はちつと耳を澄ました。それは無論五郎兵衛の語り口を聞いてゐるのではなくて、聲の出どころを聞いてゐるのである、自分の多くの門弟のうちにも、これほど調子の整つたものがない、この百姓はよほど天稟が備はつてゐると、そこは専門家だけにすぐに、こんな風に見出して耳を澄ましてゐるのであつた。聞いてゐるうちに、「こんな立派な素質をもつてゐるものを太夫にしてやつたら」とかうも思つた。

理兵衛はたうとう五郎兵衛を我前に呼び寄せた。二人の問答がどんなことであつたかは云ふ必要がない。

五郎兵衛は憧れきつた日頃の大望が成就した喜びに躍り上がった。時に寛文十一年、百姓五郎兵衛二十一歳。

昨日まで鋤鍬をとつて土を掘りかへしてゐた五郎兵衛は、鍬だこの出來た手に拍子扇を持つ

て、名門の前に稽古を勵む身となつた。

師匠理兵衛の薫陶はいふに及ばず、時として大師匠井上播磨掾の口傳をも享けて、日夜の熱心な稽古ぶりは、さなきだに天稟の素質を有つてゐる五郎兵衛をして數年ならず、道頓堀虎屋



像(據後筑)夫太義本竹

喜太夫座の床へと送る日が來た。多分二十

三歳ごろか、もう百姓の五郎兵衛ではなくなつて、清水理太夫といふ名に變つてゐた。

この五郎兵衛こそ誰れあらう、現今傳ふるところの淨瑠璃、即ち義太夫節の開祖竹本義太夫その人で、今に至るまで斯道尊崇の的となつてゐる。

いつたいこの五郎兵衛が一百姓から身を起して、理太夫から義太夫となり、やがては鉦後掾の官名を受領して、六十餘年の生涯を、義太夫節なる藝術に捧げて、悪戦苦闘をつづけた、それはそもそいつ頃のことか、私の知つてゐるかぎりを茲に述べねばならない。

今から遡つて二百九十三年の昔、江戸では三代將軍家光が歿し、由井正雪の陰謀が露顯したといふ慶安四年、さういふ騒ぎとはなんの關はり合ひもない大阪の天王寺、南堀越の一農家で五郎兵衛は産れた。

(この生家は、こゝ二十數年前までは藁屋葺のまゝで珍らしくも往昔の面影を残してゐたが、今はもう普通の民家に建て替つてゐる。場所は天王寺西門から阿倍野橋に通ずる電車路、茶臼山停留所の西側)

やうやうに成長した五郎兵衛が、どういふ容貌の人であつたかといふと、どうも竹本義太夫といふ名よりは百姓五郎兵衛といふ名の方にふさはしい顔の持主で、無論醜男の部へ入る側である。義太夫の正像として、三世竹本長門太夫の所藏であつた、烏川庵珍藏の圖を寫した應呼堂笑山の筆、それが師弟の關係からしてわが先考に譲られ今に私の家に傳來する。その像を観ると、法體姿(法名釋道喜)で頭を圓め、眉が太く、眼は團栗のやう、開いた口は柘榴を割つた如く、どつちかと云へば物凄いい人相の方に屬する。ことに顔の中央に異様な形をもつて、踞座してゐる鼻は、一種不可思議な發育狀態を示してゐて、この鼻の爲めに非常に顔全體を怖ろしく見せてゐる。さうはいふものゝ、つくづく考へて見ると、義太夫ほどの大偉業を完成した

ものとして、殊には餘人の及ばざる豊富な音量をもつてゐ、生理的にも何處か違つた點があるに相違ない。さう思つてこの鼻を見てゐると、不撓不屈の彼が大精神は磐石の如くこゝに根を据ゑてゐるのかとも思はれるのである。事實義太夫の音量は、道頓堀の小屋の内の聲が向ふの濱側まで聞えたといふ記録があるのだから、尋常のものではなかつたことが想像される。音量を生命とする義太夫節と、太夫の鼻と、そこに何か關聯があるのではあるまいか、近世に於ても、呂太夫、組太夫、大隅太夫の如き大物話りの人々の鼻が著るしく立派なものであつたことも尙ほ記憶にあるし、豊竹呂昇の如き女性にして尙ほ普通人を遙かに超越した巨鼻をもつてゐたと覺えてゐる。

いつの頃からのことか知らないが、素人で義太夫節を語るものを天狗だといふ。鼻を高くする、といふことなので多少高慢を侮蔑した意味を含んでゐるが、いつの間にか自他共にかう稱へてしまふことになつてゐる。これは淨瑠璃の仲間ばかりに限らず他の諸藝に遊ぶ素人達の間にも天狗の稱は使はれてゐるか、義太夫節ほどに盛んではない。斯道では素人の會に自ら、天狗に囚んだ杉の木會、鞍馬會、鼻高會、競鼻會など奇抜な名稱をつけた會もあつたと覺えてゐる。それほどに淨瑠璃と天狗鼻といふものが密接になつてゐるところを考へると、或は義太夫

の魁偉なる鼻が、こゝに一種の象徴として、後世に傳はつたものではなからうか、誰れかが義太夫の鼻にあやかりたいものと、これを傳へたのだと見ることは出来ないだらうか。

三都の淨瑠璃王

淨雲、播磨、加賀

日夜の念願を達して、たうとう一人前の太夫となり、道頓堀へ現はれた理太夫は、その藝が非凡であつたばかりでなく、頭の發達した男だつたと見えて、瞬く間に師匠や大師匠の所謂井上流淨瑠璃なるものゝ蘊奥をすつかり呑み込んでしまつた。それと同時に、なんだかまだこの上にも廣い藝の天地があるやうな氣がしてならなかつた。もともと負けじ魂と向上心に燃え上つてゐる若い理太夫、こんなことでは我慢が出来なかつた。何處までも奥の奥まで究めてかゝらねば承知が出来ないといふ氣がし出して來たのである。彼は一旦道頓堀の地を離れようと決心して、師匠の許可を得て、一座を引連れて京都へ出向いた。といふのは、京都には紀州の和